

Eさんは往來で餅を売る仕事をしている。
 以前は両国橋あたりの辻で商売をしていたのだが、ある日を境にシヨバを変えた。

「どうも橋だとか川だとかが苦手になつてしまひましてね—」

そういうことらしい。

その日。

朝からまつたく客がつかず、Eさんはかなり落ち込んでいた。餅は、鮮魚ほど新鮮さを求められるものではないが、昨日の餅ですと言つて売ることとはできない。作つた分はその日のうちに売つてしまわなければ無駄になる。

ところが昼になつても一つも売れない。

「金もなかつたんですよ。その日売れてくれなくちや翌日の仕込みもできない有り様でね。落ち込んでたというか、くさくさしていた。何とか売れてくれないかと、大声出して商売してたんですがね—」

昼を過ぎた頃、橋のたもとに浪人が現れた。

浪人は四五歳くらいの子供を連れていた。腰に二本差しているから辛うじて侍と知れるが、どこでどう身を持ち崩したのか相当の零落れぶりで、衣服はボロボロ、髪は伸び放題という風体である。浪人は、道行く人を呼び止めては頭を下げて、頻りに何かを頼み始めた。

「物乞いをしているんですね、お金を恵んでくれお金を恵んでくださいと、それは必死で頼んでるんですよ。いや、お侍さんも困つていたんでしようが、お武家さまの頼みとはいえ、いきなりお金をくれといわれてもねえ。誰も見向きはしませんよ。まあ、こつちも同じような境遇ですからね、気持ちにはわかる。往來に情がない日というのはあるもんですよ—」

そのうち子供が泣き出した。

どうやら腹が空いているらしかった。

浪人がいくら宥めても、子供は泣きやまなかった。

そのうち、浪人はEさんのほうに近寄ってきた。

「厭な予感がしたんですよ。まあ、子供は不憫ですよ。それはわかります。親なら何とかしてやりたいと思うでしょうよ。その浪人は、暗い顔して私んどこにきて、こう、店の真ん前に立つてですね、いまは一銭も持ち合わせていないが後で実入りがあつたら必ず代金を支払うから、腹を空かした子供のために餅を貸し売りしてくれないかと、こう言うんですね」

朝からまつたく実入りが無いのだと浪人は言った。それはEさんにしても同じことである。

「断りました。ケチつたわけじゃないですよ。いや、客がつかなくてイライラはしてましたけどね、商品が惜しかったわけじゃないですよ。餅なんて高価なものじゃないですからね。実際、浪人があんなこと言い出さなげりや、私のほうから餅をあげてたかもしれない。子供は哀れでしたから。坊やあげよう、と言つてたでしょう」

でもねえ、とEさんは顔を顰めた。

「こりや言いわけじみてるんですが、餅を一個恵んでくれと言われたらね、あげないでもなかったと思うんですよ。まあ、どうせ売れ残るもんなんだし、あげていたでしょうよ。でもね、その浪人は金は必ず後で支払うと言ってますよ。そこがね、なんとも未練たらしく聞こえたんです。こっちもね、少しでも売れてれば貸し売りだつて考えないでもなかったんですよ。でも、餅を買う人もいないつてのに、物乞いに金を恵んでやる者がいるとは思えないでしょうに。景気が悪いのは一緒ですからね。つまり、結局は貸し売りじゃなくつて、くれてやることになるわけじゃないですか。どうせ泣き落としで踏み倒される羽目になると、そう思つたんです」

どうせ金は払えないのだから素直に恵んでくれと言え—Eさんは、そう思つたのである。お腹を空かせた子供は可哀想だつたけれど、この期に及んで義を重んじるようなことを言うのはどうにも鼻持ちならない。町人であるEさんには、そうした武家のプライドが鼻についたのだった。

だからつれなく断つた。

子供は益々泣き叫んだ。

丁度そこに、雪駄直しの男が通り掛かった。

「まあ、雪駄直しというのは、非人さんの商売ですよ。つまり、私ら町人より身分の低い人たちということになりますわな。その雪駄直しがね、見るに見かねたんでしよう、浪人に声を掛けた」

これは甚だ難儀なご様子です、お子様のため餅代を立て替えましょう——雪駄直しはそう言つて、有り合わせの、たぶんなけなしの銭を出してEさんに渡したのだという。金をもらつた以上は誰であらうと客である。Eさんは餅を浪人に渡した。

「私もね、内心ほつとしましたよ。その非人さんにはお礼を言いたい気持ちでしたよ。まあ、私も意地張つてただけで、意地悪がしたかつたわけじゃないですからね。それに、私にしてみても、その日最初の商売ということになるわけですね。もらつた額より少し多めにね、浪人にお餅を渡してやつた。浪人はその雪駄直しに、かたじけない、かたじけないと何度も何度も丁寧に礼を言つてました。それから泣いてる子供に餅を食べさせた。いや、これでめでたしめでたし——と、なれば良かったんですが」

浪人は子供が泣き止むと急いで往來に取つて返し、再び物乞いを始めた。

「いや、私もね、その雪駄直しの男も、子供がお餅を美味しそうに食べるのを見ていたんですよ。二人ともああ良かったなあと、そう思つていたわけです。金が惜しいとか、恩を売つてやつたとか、そういう気持ちはこれっぽっちもなかったですよ。お腹空かせてわんわん泣いていた子供が、泣きやんで美味しそうにお餅食べてるんですからね、良かったと思うでしょう。私もね、雪駄直しに金返してもいいような気分でしたからね。でも目の前で返しちやつたら、せつかくの非人さんの親切が無駄になるでしょうに。だからまあ、ここはこれで取めてしまおうと、そう思つてたんですよ、私たちは。ところが——その、子供の父親のほうはです、ね、そりや物凄いな形相で、こう、人を捕まえちや金をくれ金をくださいと物乞いしてるわけですよ。こりや何ともおかしな具合で」

雪駄直しも少し怪訝に思つたのか、立ち去らずに浪人の動向を気にしながら子供の横に止まつていた。

やがて浪人はEさんの店の前に駆け戻つた。幾人か浪人に金を渡した者がいたようだった。浪人があまりにも必死なので、きつと気圧されたのだろう。

そして浪人は握りしめていたもらいたての錢を雪駄直しに無理矢理押し付けた。雪駄直しは面喰らったようだった。

「いや、まあ、確かにね、借りたものを返すのは道理でしょうよ。でも非人さんにしてみれば貸したという感覚はなかったと思うんですよ。親切でしたことですから。それにねえ、こうあからさまにされると、どうなんでしょうね。頭は下げてるんだけど、感じ悪いでしょう。身分の低い者の施しは受けられぬ—という感じじゃないですか」

そして。

浪人は突然子供を抱き上げると橋の上から川に投げ落とし、自分も続けて川に飛び込んで、死んだ。

どうなんでしょう、これは—とEさんはとても悲しそうな顔をした。

*浪人—仕える主を失った武士。

義は命より重き事 (耳囊卷之二)

近き頃の事や。いか成者の身の果なるや、兩國橋にて袖乞しける浪人、四、五才の子を連れて往來へ合力をねがひけるが、或日往來の情もなく一錢も貰ひ得ざりしに、其子空腹〔腹〕に成りしや頼りに泣きて不止、親も不便に思ひて辻に出し餅賣に、「此者空腹にて歎けども未一錢も貰ひ得ず。後程貰ひなば可返間、一つ商ひ呉候様」申ければ、餅賣聞て、「我等も今朝より商ひなし。難成」よしつれなく申ければ、いとゞ其子は泣きけびけるに、側に居し雪駄直しの非人、有合の錢を少々遣はし、甚の御難儀也。立替進する」よし申ければ、辱、由厚く禮いふて彼餅を調へ其子に與へ、往來へ願ひて錢をひ受彼非人へ戻し、其子を橋の上より川中へ投入、我身もつゞきて入水して果しこ也。